

## 「内田康哉伝記草稿」について

内藤和寿

### 一

明治、大正、昭和の三代にわたり、三度外務大臣の任にあった内田康哉の伝記が、昭和四十四年、『内田康哉』（鹿島平和研究所発行）として刊行されたが、この伝記のもととなった伝記草稿が当史料館に保管されており、これをこのたび後掲のリストのように整理し、一般の閲覧に供することとした。

そこで本稿では、内田康哉伝記の編纂経緯及び伝記草稿の概要について、以下それぞれ述べることにしたい。

### 二

内田康哉は、慶応元年熊本県に生れ、明治二十年外務省入省、一時

農商務省に移った後、外務省に復帰、以後、政務局長、総務長官、清国公使、オーストリア大使、米國大使などを経て外相（第一次：明治四十四年十月～大正元年十二月）、ロシア大使、再び外相（第二次：大正七年九月～大正十二年九月）、枢密顧問官、満鉄総裁を歴任、その後三たび外相（第三次：昭和七年七月～昭和八年九月）に就いた。この間、明治、大正、昭和と外相にあること通算七年四ヶ月を数え、辛亥革命、パリ講和会議、ワシントン会議、またシベリア出兵、更に満州事変など重要な外交問題の処理にあたった。とりわけ第三次外相時代の昭和七年八月、第六十三議會で満州国承認問題にふれ、「所謂拳國一致、国を焦土にしてもこの主張を徹することに於ては一步も譲らない」と答弁したことにより、「内田焦土外交」として知られている。そして、健康を害し外相を辞任した翌昭和十一年三月、満七十歳の生涯を閉じたのである。

さて、ここで取上げる内田康哉伝記は内田の没後、同氏と親交の

あった青木新元公使（内田と同じ熊本県出身。内田外相秘書官、メキシコ公使、スペイン公使などを歴任し、昭和十一年十二月退官、同四十五年一月死去）が中心となり昭和十二年から執筆され、翌十三年十月には「故内田伯伝記編纂委員会」が設置され、外務省の後援、南満州鉄道株式会社及び日魯漁業株式会社の援助を受け、その編纂事業が始められた。その際には外務省内の事務室一室を使用し、本省保管の記録などが調査された。

本事業は終戦前頃までには膨大な草稿が作成され、昭和十七年一月の外務省庁舎の火災により内田の自筆日記などの資料を失いはしたが、伝記草稿だけは青木氏の自宅にあり焼失は免れた。この外務省火災の際の事情を青木氏は、「内田康哉伯遺稿写」の前書きに次のように記している。

内田伯傳記原稿及資料ハ去一月九日未明外務省火災ノ際殆ト全部焼失シタルガ当時同僚ト共ニ余煙ヲ冒シ辛フシテ拾取シ得タル半焼ノ書類中ニ伯ノ遺稿ノ一部ヲ見出シタルハ実ニ奇蹟ニ庶幾シ乃チ遺稿ノ残骸ヲ整理筆写シ傳記両稿ノ資料ト為シ、伯ノ手記ニ係ル原文ハ別ニ鄭重ニ保存ス

昭和十七年三月誌 青木

（遺稿）

そして伝記原稿は昭和十八年外務省へ提出されたが、戦争中の印刷事情から出版は見送られた。更に戦後になり昭和二十七年頃より再び検討が加えられたが、青木氏の健康上の理由によりその刊行はまた、遅延を余儀なくされた。

しかるにその後、日本外交史の研究が進むに連れ同伝記草稿の存在が学界にも知られるようになり、この公刊が強く望まれるようになった。そして昭和四十二年、旧委員会を「内田康哉伝記編纂委員会」と改組、外務省も同事業を助成し、内田康哉外相の主要な業績を明らかにするとともに学界その他一般に資料を提供することとし、なお一層の推進が図られた。このため原稿の整備には慶応義塾大学池井優助教授（当時、現教授）が当たり、青木氏の原稿を「凡そ四分の一に圧縮」し、その草稿の整理に努めた。また、同四十三年、同助教授の海外出張後は外務省の大山梓事務官（後に広島大学教授、故人）がその後を引き継いだ。

こうして昭和四十四年一月、『内田康哉』（内田康哉伝記編纂委員会・鹿島平和研究所編、全四一〇頁）が鹿島研究所出版会より発行される運びとなったのである。

### 三

ところで同草稿は、B5判縦書きの外務省九行罫紙にペン書きされたものが主体を成しており、内田の各時代ごとにまとめたものに白の板目紙のカバーを付し、紙紐で綴じられている。現在、四十九冊残されており、その総枚数は英文を含め一万枚を越えるものとなっている。そしてこれを今回更に全二十一冊に合冊し、青ファイルカバーを付し整理した（詳細は後掲の目録参照）。前述のように刊本にするに

当っては、原稿を約四分の一に圧縮したためこれに収録されなかった興味深い資料も含まれており、内田外交、ひいては日本外交史を研究する上で極めて有用な資料であると思われる。

参考文献

- (1) 外務省記録「諸修史関係雑件」(N・2・1・0・4)
  - (2) 図書『内田康哉』(昭和四十四年一月、鹿島研究所出版会発行)
  - (3) 論文
    - 河村一夫「内田康哉伝記草稿を讀みて―特に宣統帝との親交について―」(『日本歴史』昭和五十一年八月号)
    - 河村一夫「内田康哉伝記草稿所収の朝鮮関係一覽書について」(『朝鮮学報』第八十三輯 昭和五十二年四月)
    - 河村一夫「満州国承認問題と齋藤首相、内田外相」(『軍事史学』第十八卷第二号 昭和五十七年九月)
    - 池井 優「内田康哉―焦土外交への軌跡」(『国際政治』五十六 昭和五十二年三月)
- (記録整理・閲覧室)

内田康哉伝記草稿目録

件名	冊数	備考
1 総目次、生い立ち時代、青年外交官時代、公使館書記官時代	1	4冊を合冊
2 局長、総務長官時代、駐清公使時代	1	2冊を合冊
3 駐澳大使時代	1	

4	駐米大使時代	1	上、下2冊を合冊
5	第一次外相時代	1	上、中、下3冊を合冊
6	駐露大使時代	1	2冊を合冊(内、1冊は第一草案)
7	第二次外相時代	5	一、十一(但し、十は上、下)の12冊を合冊
8	第二次外相時代 巴里講和会議関係	1	一、二の2冊を合冊
9	第二次外相時代 ワシントン会議関係	1	一、二、三及びワシントン会議後の4冊を合冊
10	第二次第三次外相時代 対露関係	1	一、二の2冊を合冊
11	枢密顧問官、同仁会会長時代	1	上、中、下3冊を合冊
12	滿鉄総裁時代	1	一、二の2冊を合冊
13	第三次外相時代	2	上、中、下及び二の4冊を合冊
14	晩年と追憶	1	
15	附録 歴代内閣及外相表、新聞記事	1	2冊を合冊
16	遺稿	1	3冊を合冊、内訳は①在清書記官②駐清公使③写(農商務省時代・英国在勤時代・駐清公使時代)